



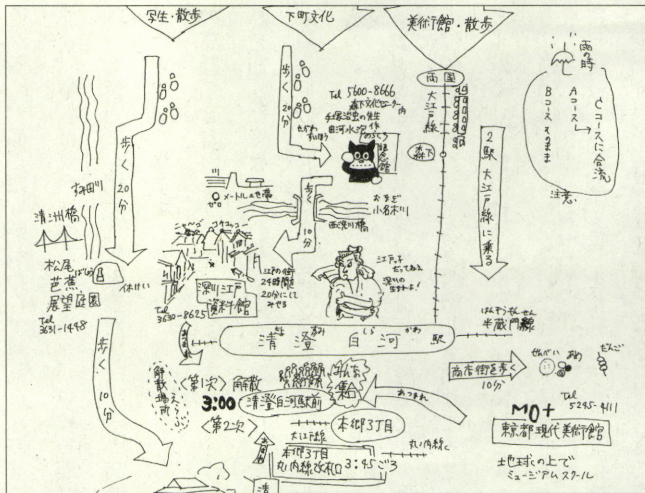
## 見えているもの

辰巳 豊

筆者は幼児教育が専門ではなく、小学校の学級担任です。ここでは子どもたちと日ごろ接している中で感じていることを記すこととします。

突然ですが、今度遠足へ行くということが決まりました。教員仲間で打ち合わせをするという状況を想像してください。いつのころからか、あることに気づきました。駅からこう行つて、ああ行つてという話し合いをしますが、どうも話のとおりが悪いのです。そこで私が図解して示します。簡単なイラストマップ

を描く訳です。そうするとなるほど、そのコースがいいというように、初めて話し合いの舞台に乗ることができるので。何度かこういうことを重ねるうちに、ある推論に達しました。人間には、二種類あって自分がいま考えていることがイメージとして脳の中のスクリーンに投影されている人と、そうでない人とがいるのではないかと。ちよつと大胆な、そして乱暴な見解のようですが、思い返すとそういったことってあるのではないのでしょうか。遠足のプリント



▲遠足の行程を図示した案内プリント（部分）

を書くのは私の役目というのが常となっております。その号ばかりは、ワープロ打ちではなく、手描きのイラスト入りです。計画全体をビジュアルにとらえたほうがわかりやすいと思うからです。

こんなことがきつっかけて、筆者は人間が脳の中で描くイメージというものに興味をもちました。これから、紹介するのは、小学校三年生の社会科の授業で行った「学校のまわり調べ」の実践です。

社会科の授業は、いまでは低学年では生活科という教科に統合されています。低学年では自分や家族のことに関心をもつことから始まり、学校生活のことへと学習の対象が広がっていきます。そして、三年生になると社会科という教科に分化し、学校の周りに目を向けます。それから自分の住む地域や県、やがて国へと広がっていくわけです。「学校のまわり調べ」は、調べ学習の一つに位置づけられているのです。

さて、小学校の調べ学習においては子どもの実感が何よりも大切にされています。本などで調べた間接的な知識よりも、実際に自分の眼で見て、足で歩いて感じた直接的な知識を重視します。本校は武蔵野台地の崖線の終点に当たるので、周辺には急な坂

道が多く、都心にもかかわらず湧き水も豊富にあります。学校は高台にあるのですが、学校の周囲をぐるっと歩いて一周すれば坂道だらけ。その高低差に改めて驚かされます。いったい、子どもたちは、この高低差をどのようにとらえているのだろうか。それを知りたくなったのが、この実践を行ったそもそのきっかけでした。一般的な授業の流れでいくと、次のように授業の流れは進みます。

まず、学校の周り探検の計画を練ります。屋上へ方位磁石を持っていき東西南北を知ります。北にはビルが多い、西にはサンシャインの高層ビルが見える、南は低いビルしかないなどの意見が出ます。教室に戻り、みんなの意見を集約します。北には高いビルが多いが、南には低いビルが多いのではないか。この時点ではそんな予想が出ます。次に探検で見えるべき注目を絞ります。ビルの高さに注目しようということになりました。高さをどうやって調べるとのか討論が続きます。「正確な高さの測定はできな

いけど、ビルの高さを数えればいい」という、子どもでも実行可能な方法に落ち着きました。四人が一緒に、道の左右に分かれ、数え間違いがないようにそれぞれ二人で階を勘定し、ノートにメモを取るシステムとしました。

いよいよ探検に出発の日となりました。子どもたちの眼は好奇心でいっぱいです。急いで回れば十分ほどで学校の周囲は一周できますが、ビルの高さを数えメモを取りながらなので、たつぷり授業二時間分、それでも足りずに前後の休み時間を加えて正味百分にも及ぶ大調査です。こういう時に厄介なのは、子どもによって興味のある場所や、そこでの関心の度合いが異なることです。各々のペースで思い残すことなくやらせてあげたいのですが、全体時間のペース配分や安全管理上のこと、はたまた近隣住民への迷惑などを考えると、どうしても集団で一斉行動を取らざるを得ません。そんな状況でも子どもたちは工夫しながら各々の目的を達していきます。細



はともかくとして、子どもの心に深く大きく残ったといえるでしょう。この感動を表すのに、果たして従来のようなまとめの方法が本当に適しているといえるのでしょうか。

私は、土地の高低を問題にしているので、紙に書くのではなくて、もっと立体的なやり方でまとめを試みないかと投げかけました。やはり従来のようなポスター形式でやりたいと言ったグループもありましたが、大半は私の考えに賛同してくれました。

言ってはみたものの、立体物を作るのは簡単ではありませんでした。台紙を用意し、紙粘土も用意しました。紙を折ってビルを建たせるグループもありました。平面で処理して表現する方が手間もかからずたやすいと思いますが、立体で表現する方を選んだ子どもたちは喜々として作業を進めます。鼠坂のポリウムを表現するために紙粘土が次々と投入されます。材料の用意はそれほどなかったたので、毎日のように教材屋さんへ電話をすることになりました。

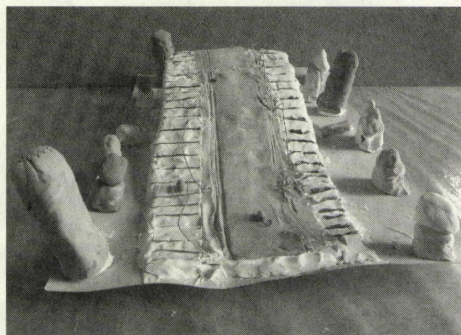
### 鼠坂グループ

の製作の様子を見ていて気づいたことがあります。一つは、

子どもなりにリアリティーを追求しようとしていることです。

坂の勾配、手す

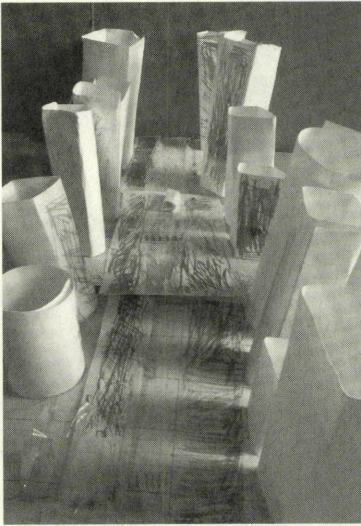
りや階段。郵便屋さんが立ち寄った家。スケールも違っているし、ディテールも不正確だけど、彼らの論理があり、あれこれ意見を言い合い、修正しながら進めています。もう一つは鼠坂にファンタジーの世界が加わっていったことです。小さな鼠たちが登場し、懸命に急坂を登っていきます。実際に自分たちの手を動かし、具体的に三次元の物を創っていく間に、さまざまな感覚が総動員されている様



▲写真1：粘土で表現した鼠坂

子をほほ笑ましく眺め楽しんでいた私でした。

続いて、こちらは紙を折りビルを建てていったグループです。ビルの形を正確に復元している訳ではありませんし、高さにも誤りがあります。しかしながら、何階のビルはこれぐらいと自分たちの感覚を頼りに高さを微調整していました。切りすぎてしまい、低くなりすぎたビルは紙を継ぎ足して高さを調整するといった具合です。大人がちよつと見ただけでは、あまりきれいにできあがっていない紙工作ぐらいにしか思えない代物ですが、彼らにとって



▲写真2：紙で作ったビル群

は知恵と汗の結晶なのでした。

このように見えてくると、大人が外見で判断する以上に子どもは豊かな世界をもっていることがわかります。できあがった外観では想像できないイメージの世界。それを教師はどこまで見抜いてあげられるかが勝負だと思います。

学年が進むにつれ、表現は言語に中心が移ります。低学年の絵日記は、高学年になると絵がとれて日記となります。特に日本の教育はそういう方向性をもっているような気がします。思考を抽象化した言語というものは、それなりに緊張があり、奥行もあります。文字の配列や組み合わせだけで、さまざまな感情を表すことは大変な高度な精神作用だと認めます。しかし、ビジュアルな表現をしていくことを軽視してはいけなないと考えます。絵が文字にとって代わることだけが子どもの発達ではないことを、常に心に留めていきたいと思います。

(お茶の水女子大学附属小学校)